

言葉と世界の解釈

9月12日

「虹は七色」といいます。しかし、よその国ではそうではありません。「虹は十色」でも、それ以上でもありです。

虹の色そのものは七色ではなく、その実体は連続した色彩としかいえません。

それを7色という非連続（離散）な色として認識表現しているわけです。だから、「虹は七色」は万国共通のものではないのです。

もう1つ。わが国では「兄、弟」、「姉、妹」という言葉が根付いていますが、例えばアメリカのような他の国ではそうではありません。

親族（血縁）関係を重視する固有の文化が、兄と弟、姉と妹の言葉の明確な区別をさせているのです。ちなみに辞書で **brother** をひくと兄弟、兄あるいは弟とでできます。**sister** もまたしかりです。

「言葉なしで世界に立ち向かいことはできない」（井上ひさし『本の運命』）のですが（注1）、その言葉の背後にあるもの、ここが重要です。世界の解釈もそれによって異なってきます（注1）。

ここが言葉なるものの重要なところで、またこわいところです。

日本経済新聞1面のコラム「春秋」は朝日の「天声人語」ほど知れわたっていませんが、ときに唸るような名コラムに出合うことがあります。9月12日の春秋など、その格好の例といえます。

では、何に唸るのかといえば、その前段（井上ひさしの引用）と後段（原発事故の吉田調書、ここが言いたいところ）とのつなぎであり、その巧みさです。

吉田調書なるものは、ここでの世界つまり原発事故という「無秩序な連続体」に言葉で切れ目を入れたわけです。

だが、先の虹は七色でも八色でもあるように、その切れ目の入れ方で世界の解釈は異なります。

そこに「思い込みや功名心、一時の感情の高ぶり、保身の情も紛れているかもしれない」のです。

証言という原発事故（連続体）の切り取りで、連続体を再現できないのは、「虹は七色」と言うのと、同じです。ともに連続体として真の姿は説明できないのです。

「皿の上の料理から食材の姿を思い浮かべるのが簡単ではない」のです。

この名コラムを是非味わってみてください。

2014.9.12

春秋

言葉を会得するということは、自分の周囲にふつと沸き立っている無数にして無限の、無秩序な連続体に、言葉で切れ目を入れるということなのです。井上ひさしの『本の運命』の一節である。えたいの知れない素材をさばく包丁に、言葉をたとえればいいか。

▼言葉にうるさかった井上さんは続けた。「切れ目を入れることで世界を整理整頓し、世界を解釈するわけですね。言葉なしでは世界に立ち向かうことができない」。その通りだ。しかしまた、切れ目の入った世界はもはや世界そのものではない、とも言える。包丁でさばいたものが往々にして原形をとどめていないように。

▼政府の福島第1原発事故調査・検証委員会が関係者から集めた調書のうち、19人が公開された。故吉田昌郎第1原発所長のほか、菅直人首相、枝野幸男官房長官ら時の政府の中心人物が、ふつと沸き立って無秩序のふちにあった世界に切れ目を入れた言葉の束である。そうした世界に立ち向かった人々の記録である。

▼と同時に、調書とはそれぞれの解釈の結果でもある。思い込みや功名心、一時の感情の高ぶり、保身の情も紛れ込んだかもしれない。皿の上の料理から食材の姿を思い浮かべるのが簡単ではないように、証言だけから原発事故の真の姿を再現することはできないだろう。言葉の束にまた言葉で切れ目を入れる。難事である。

※注

1) ちなみに『本の運命』（文春文庫）第3章に「井上流本の読み方十箇条」というのがあります。井上の生い立ちもふくめ、同書を紹介しておきます。

2) マックス・ウエーバーに影響を与えたリッケルトの「文化意義」（「文化意義」的認識論、「文化意義」負荷性）と関わります。

さらに重要なのは、それが歴史的な共同性をもつ主観（共同主観性、間主観性）であるという点です。馬渡尚憲『経済学の方法ロジー』152-53 ページ参照。科学理論での認識の観念負荷性（理論負荷性）も参照。